

六月例会発表要旨

特集

デジタル・ヒューマニティーズと 文学研究のこれから

【特集の趣旨】

運営委員会

二〇〇〇年代以降、近代文学研究をめぐってデジタル環境は急速に整備され、資料のデジタル・アーカイブ化や、辞書や研究論文の検索といった基礎作業の機械化が行なわれるようになった。近年、その波はさらに大きくなり、より多くの資料や研究ツールが電子化されている。岩波書店の『新日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系 明治編』をはじめ、日本文学の根幹資料が次々にデジタル化され、一括検索が可能となった。講談社『日本近代文学大事典』のデジタル改訂版プロジェクトが発表されたことも記憶に新しい。

今後ますます作家全集のデジタル化が進んでいくにあたっては、さらなる研究状況の発展も期待されよう。

近年では、研究方法そのものに、情報技術を取り入れた文学、文化史研究も試みられている。例えば、全集などの編纂を解析し「本文」の扱いを更新しようと試みる、デジタル文献学の手法が現れた。また、データの計量的解析から特徴を抽出するテキスト・マイニングの手法を用いた研究が、これまで想定しなかった言葉や概念の結びつきの可能性を示し新たなテキスト理解をもたらしているものとして注目されている。これらは、精読を重んじてきた既存の文学研究に対してフランコ・モレッティが挑発的に提起した「遠読」というアプローチとも響き合うものであろう。

今回の特集では、研究資源、研究手法の圧倒的なデジタル化の波の中で、今後どのように近代文学研究が発展してゆくのか、あるいは、すべきなのかについて、議論をしてみたい。資料がほぼすべてオンライン化されて誰にでも見られるようになり、おおかたの作業が機械で代替可能になるとすれば、資料発見やテキスト解析に求められる条件とは何か。また、用例探索や言説分析、翻訳や物語の構造分析さえも機械がたくみに代行するようになったとき、「文学研究」のありかたはどのように変わるのか。その時、これまでに蓄積された研究の成果や手法の、何が覆いかくされてしまうのか。あるいは、ひとつのテーマを選択するやいなや関連文献が無際限にひろがっていくように見える情報環境のなかで、どのように「研究対象」を捉え、どのように「研究主体」を立ち上げてゆくことが可能なのか。

近年、デジタル・ヒューマニティーズについて精力的に取り組まれてきた諸氏に、研究の実践例や研究方法を伺うことによって、技術が近代文学研究にもたらすものを考え直す契機としたい。

機械とともに文学を読むこと

ロング・ホイト

当然のことながら、文学研究のありかたは時代やテクノロジーと共に変わる。それは、新しいテクノロジーがもたらす情報環境と切っても切れない関係にあるのだ。以前の研究者や批評家が活字化されたテキストや図書館などの枠組みの中で「読むこと」について検討してきたのに対して、今日の研究者はデジタル化されたテキストや人工知能などの枠組みの中でそれを再考しようとしている。アメリカではこの十年間、フランコ・モレッティの提唱した「遠読 (distant reading)」という概念の下で、コンピューターを使って様々な観点から文学研究のありかたを考え直してきた。特に目立つのは「機械学習 (machine learning)」という分析方法を借りて拡張した規模から文学史を解析する傾向だ。

本発表ではこういった「機械で読む」傾向を概説した上で、それを日本の近代文学史に適用した自身の実験的な研究の試みを紹介す

る。もともと「遠読」とは、今日そう理解されているように、ただ計量的に文学を読むことではなく、文学の進化を世界的・比較的な視点から理論化することを意味していた。この二つの意味が重なるところで、どのような文学研究が可能なのか。

事例として取り上げるのは、昭和初期における「意識の流れ」の受容である。まず、この独特な形式を英語テキストの中に探るため、計量的なモデルを作る。いくつかの言語的な特徴から構成されるモデルを用いた「機械学習」の方法によって、数千のテキストの中にどれほど「意識の流れ」に似ている文章があるのか計測することができる。次に、モデルを日本の状況に合わせた上で、日本語における「意識の流れ」にはどのような特徴があるのか、そして、大正一四年から昭和一五年までに出版された七〇〇以上のテキストにおいてどれほど普及していたのか、ということとを解析する。

このような研究の目的は、今までの文学史記述や文学作品の読解を、機械を用いたそれと取り替えることではない。むしろそれは、従来の世界文学史をどう補うか、またはどう

相対化するかを問うことにある。機械とともに読むことは、これからの文学研究を再考するためにはどれほど重要か、以上のような実験的な研究の試みを通して考えたい。

古い問題との新しい格闘

明星 聖子

これからの文学研究は、デジタルの「本」に基づかざるをえない。二十数年前、ドイツに留学したとき、このことを痛感した。文学全集の本質はデータベースであり、であるなら、文学研究の基盤は紙の本からいずればデジタルメディア上に移行する。私が研究の対象とするカフカのテキストは、そのときどんなものになるのか。既存の二種類の学術版にすでに物足りなさを覚えていた私は、将来の新しい文学全集をいつしか夢想し始めた。デジタル本としてのカフカ・テキストは、どうあるべきか。この思考のためには、近代文学テキストの学術的な編集に関する理論の学習が必要である。そして、編集文献学

(Editionsphilologie) という、当時ドイツを中心に隆盛していた新しい学問分野の勉強にのめり込んでいった。

十年ほど前、文学研究資料のデジタル化に関わる二冊の訳書を出版した。その間の事情については、うち一冊の『グーテンベルクからグーグルへ』のあとがきにかなり詳しく書いている。ようするに、一緒に考えてみたかった。日本の文化の根幹を成すテクストの編集を担うのは、日本文学の研究者たちである。

彼らと議論してみたかった。ただし、この思いが伝わるには、相当の時間がかかることもわかってはいた。なぜなら、私がかぎり、その種の議論は、日本ではまだ表立ってはおこなわれてこなかったから。

ようやく始まるのかもしれない。深い感慨を覚えながら、この原稿を書いている。共に考えたかったのは、本質的には古い古い問題。二千年以上前から、人文学者たちが連綿と取り組み続けてきたこと。パピルスだろうが、羊皮紙だろうが、デイスブレイだろうが、何も変わらない。物理的素材が何であれ、テクストの概念的状態は同じである。

私たちは、何を探究しているのか。その探

究のために、私たちは、どんな「本」を必要としているのか。新しいデジタルの時代が到来したからこそ、太古からの問題に立ち向かいたい。まずは、そこからだと思っている。

読書場を読む

——資料採掘・データ化・文学館——

渡部 麻実

資料のデジタル化をめぐる状況には、まさに日進月歩の感がある。また、新型コロナウイルス感染症の拡大は、文学研究における電子資料の重要性を、改めて認識させる機会ともなった。もつともその恵沢は、資料へのアクセスを良好にすることにとどまらない。たとえば、報告者が主たる研究対象としてきた堀辰雄の場合、手稿の多くが鉛筆、とくに色鉛筆で記されており、デジタル化によって、これまで捉えられなかった記述が見出せるようになる可能性も高い。

他方、資料のデジタル化に比し、デジタル化された資料の公開・共有は、必ずしも急速

には進んでいない。遺稿や、書き込みの施された旧蔵書といった肉筆資料類は、文学館に所蔵されているケースが多いが、資料のデジタル化を推進している館にあっても、閲覧を館内に限定している例は珍しくない。多少目を転じてみるなら、観光地に立地すること、地方公共団体が設置し、観光誘致に貢献することも多い文学館に対し、新型コロナウイルス感染症が、新たな課題を付け加える契機となったことも推察されるだろう。電子資料の重要性が増すなか、とりわけ一次資料のデジタル化をめぐつては、それを支える拠点としての文学館の今後にも、目を向ける必要があるのかもしれない。

本報告では、旧蔵書への書き入れから再構成される〈読書場〉をキーワードに、一次資料の採掘と、二次資料としてのデータ化をめぐる文学研究のこれからについて検討してみたい。その際問題となるのは、デジタル化が、単に研究の効率化に資するのみならず、文学研究に対し、新たな可能性を開く手段足り得るのか、ということではないだろうか。堀辰雄文学記念館（軽井沢町）ならびに神奈川近代文学館所蔵の堀辰雄旧蔵書と、遠藤周作文

学館（長崎市）所蔵の遠藤周作旧蔵書の分析を手掛かりに、上述の問題への接近を試みることで、議論の端緒としての役割を果たしたい。

なお、感染症の拡大状況に応じ、新規の調査が十分に果たせなくなった際には、報告の目的は変えず、分析対象を変更する場合もあることをご寛恕いただきたい。

会員の皆様へ

○海外在住会員について

海外に在住されている場合、海外在住会員として申請して頂ければ会費は半額となります。通常会員から海外在住会員への変更、または海外在住会員から通常会員への変更の際には、渡航前にご連絡下さい。変更の届け出より前の海外在住期間中の会費減免には応じられません。また、くれぐれも住所変更等のご連絡を忘れないようお願いいたします。

なお、海外への住所変更のご連絡は、海外在住会員への変更届として扱わせていただきます。

○退会時の会費滞納について

近年、会費滞納のまま退会される事例が増えていきます。退会時には会費の滞納がないかご注意ください。滞納が続けば自動的に退会とはなりますが、退会されても滞納の未払いは存続します。退会の際は滞納分をご精算下さいますようお願いいたします。

○会員、会費に関する諸連絡先

お茶の水学術事業会

〒112-8610 東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学理学部三号館二〇四号室

お茶の水学術事業会 「日本近代文学会」係